

西谷文和の「戦争あかん」シリーズ ③

オバマの戦争

アフガン最前線から
平和の仮面を剥ぐ

西谷文和

アフガン遊牧民を米軍機が誤爆、
大やけどで救出された少女……。
オバマがノーベル平和賞を受賞したのは、その3日後だった。

ブッシュのイラク侵略
オバマのアフガン侵略

せせらぎ出版



西谷文和の「戦争あかん」シリーズ 3

オバマの戦争

アフガン最前線から平和の仮面を剥ぐ



西谷文和

せせらぎ出版

アフガン編 序章

3

神様、助けて！・3／ノーベル平和賞？・5

第1章

カブールにて

6

避難民キャンプ・6／救援物資を配る・12／廃墟の街で―片足の男たちの叫び・14／なぜ女性がいらない？・17／破壊の街・18／自爆テロの現場で・19

第2章

カンダハールにて

23

タリバンの拠点といわれる街で・23／はびこる戦争ビジネス・25／なんと日本人看護師と遭遇・28

第3章

バーミヤンにて

31

世界遺産の町・31／「嘆きの町」の膨大な地雷・32

第4章

タリバンの正体

38

なぜ戦争が続く？・38／9・11からアフガン戦争へ・41／テロの種をまいたアメリカ・43

●column その後のアフガン……・44

イラク編 序章

45

第5章

サマワからバグダッドへ

47

日本人だけ入れない？・47／オレンジで黙祷・47
●column なぜサマワにだけ入れなかったか？・49

第6章

バグダッドにて

50

無念の思い渦巻く街・50／終わっていない戦争・52

第7章

モスルにて

56

恐怖の国境越え・56／深く傷ついた子どもたち・58

あとがき

西谷文和

参考文献

63



やけどの痛みに耐えかねて泣くビビちゃん

アフガン編 序章

神様、助けて！

写真の子どもはアッサン・ビビちゃん（9）。米軍の空爆で全身大やけどを負っている。

「アッラー、メウサッタ（神様、助けて）」。

全身を震わせて、か細い声をしぼり出す。のどが渇くのか、たえず水をほしがる。

「フーゲッコマ、フーゲッコマ（痛いよ、痛いよ）」。

衣服が肌にこすれるたびに、激痛が走る。隣のベッドには、やはり全身をガーゼにくるまれた姉のサリマンさん（12）。ビビちゃんを心配そうに見つめている。付き添いの叔父が、

「アメリキー、アメリキー」

と叫び、その声が20畳ほどの狭い病室にこだまする。

ここはタリバンの本拠地といわれるカンダハール。市内で唯一外科手術ができるミルワイズ病院の外科病



ビビちゃんとともに救出されたサリマンさん

中で羊を追う日々を過ごしていた。

09年10月6日、家族はいつものように山にテントを張って就寝した。漆黒の闇の中、悪魔がやってきた。

「あそこに不審なテントを発見。タリバンの拠点かもしれない。爆撃します」。

「了解」。

米軍の戦闘機から放たれた砲弾によってテントは一瞬にして燃え上がった。阿鼻叫喚の灼熱地獄。

父は必死でビビちゃんと姉サリマンさんを助けましたが、いっしょに寝ていた2人の兄と上の姉は焼け死んでしまった。

棟。

ビビちゃんの家族はベドウィン、つまり遊牧民だった。ザブル州の州都カラート郊外、一家ははてしなく広がる山々の



「しまった！ タリバンではなくて子どもだった」。空爆後、「確認・調査」にやって来た米軍の地上部隊がビビちゃんらを発見する。

3人の子どものは焼け死んでいるが、2人の姉妹はまだ息がある。

「こいつらをカンダハールまで運んでやれ」。

おそらく地上部隊の米兵たちは、いいヤツらだった。人里はなれた山の中の誤爆。放り捨てて、「なかったこと」にしても、誰にもばれない。地図を見て

わかるように、カラート郊外からカンダハールまでは100キロを越える山道。飛行機かヘリを使わないと助からない。米軍機に運ばれて、ビビちゃん姉妹と叔父はカンダハール空港に到着。

「ほら、これで病院まで行け」。

米兵は2000パキスタン



ビビちゃんをかかえる叔父

ルピー（約210円）を叔父に手渡し、去っていった。謝罪も補償もなし、ただ焼かれただけ。

ノーベル平和賞？

少女が焼かれた3日後、オバマ大統領にノーベル平和賞が出た。

ビビちゃんと会おうまで、私は「オバマはブッシュよりマシな大統領だ」と考えていた。しかし今は「オバマも同じ穴のムジナ」いや、「ブッシュより罪深い戦争大統領だ」と考えるようになった。

一言で言えば「ブッシュはわかりやすい」のだ。ブッシュ↓ウソつき、戦争屋というイメージ↓多くの

人々が嫌悪感を持ち、ブッシュに反発する↓世界で反戦世論がわきあがり、米国の軍産複合体が窮地に陥る。

オバマ↓外見は平和主義者↓多くの人がだまされ、本質に気づくのが遅れる↓戦争をより長く継続することができて、軍産複合体は喜ぶ。

だまされてはいけない。私たちはもつと「オバマの戦争」に敏感になるべきだ。

「俺たちはタリバンなんかじゃない。ただの遊牧民だ。なぜ俺たちのテントを空爆したんだ」。

ビビちゃんに水を飲ませながら、叔父が悲しそうに「アメリカー、アメリカー」

とつぶやく。テレビもインターネットもない山の中で暮らす一家は、ノーベル賞はもちろん、アメリカの大統領が誰であるかさえない。彼らが真実、つまり「人殺し大統領に平和賞が出た」という事実を知れば、何と反応するだろうか……。

第1章 カブールにて

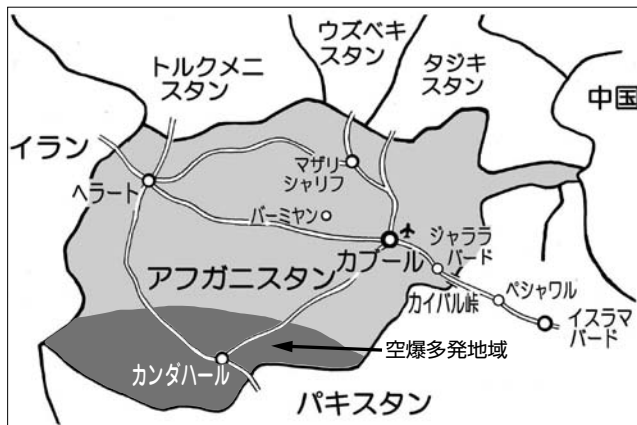
避難民キャンプ

アフガンの首都、カブールへは日本からの直行便はなく、通常UAE（アラブ首長国連邦）のドバイかインドのニューデリー、パキスタンのイスラマバードなどから乗り継ぎ便で入ることになる。

カブールは標高1800メートルの高地にあり、日差しは厳しいのだが、比較的夏は過ごしやすい。灼熱のドバイから2時間ほどのフライトでカブールにつくと、これから始まる戦場取材に身が引き締まる一方、空港に吹く心地よいそよ風に、ちょっとホッとしたのも事実である。

カブール市内から北西へわずか7キロ、広大な荒地に数百ものテントと泥でできた家が並ぶ。チャライ・

カンバール避難民キャンプは今年から3年前、07年にできた。避難民はすべてパシュトン人。アフガン南部、パキスタンとの国境近辺からここへ逃げてきている。その数、約7千500人。2007年頃から、アフガンの、とくにパキ





パンに水をかけて食べる

スタンとの国境周辺で、米軍の空爆が頻繁に行われるようになった。ちょうどイラクから米軍が撤退を始め、戦争がアフガンへとシフトしていった時期と重なる。キャンプに入るなり、多くの避難民が近づいてくる。

「俺の家族は食うに食えない状態だ。金をくれ」。

「母親が病気だ、薬を買う金がない。金をくれ」。

たちまち黒山の人だかりができて、「金をくれ」の大合唱。

「わかった、わかった。まずはみんなの生活のようすを見せてくれ。その後、何が必要か教えてほしい」。

私は必ず戻ってくる。その

時に金ではなく援助物資を配る」。

通訳を通じて説得。ようやく落ち着い

た彼らの中で、最後まで「金をくれ」と要求していたアブドラさんにキャンプを案内してもらおう。

アブドラさんは、ウルズガン州の出身。07年末、米軍が村を空爆し、村は壊滅状態になった。

「なぜ米軍はあなたの村を襲ったの?」

「村がタリバンに支配されている、という理由だ。でも村にはタリバンはいない。俺たちは普通の農民だ」。

そんな話をしながら彼のテントへ。

「これをみる! こんなバサバサに乾いたパンを、こうして食べているんだ」。

アブドラさんは干からびたパンに水をかけ、ぐふやかして、食べるようすを再現する。

「このパンは誰が?」

「近所の住民がくれたんだ」。

「国連やアフガン政府からの援助はないの?」

「まったくない。だから明日の食事にも困っている」。

ノーフード、ノーヘルプ。

イスラムではザカートといって、裕福な人は収入の

あとがき

2010年1月、アフガンは記録破りの暖冬だった。さすがにカプールの夜は氷点下まで気温が下がるが、日中は10度くらいまで気温が上昇し、例えて言えば、「近畿地方の山奥」くらいの冬の寒さだった。カプールの避難民キャンプに、雪よけのテントシートや石炭など越冬用の物資を配ったが、援助品を配布しながら、キャンプの人々の未来を案じた。夏が心配だ。

カプールから遠く、ヒンドークシユ山脈が見える。「例年ならふもとまで雪で覆われているはずだ。今年はまったく雪が降らない」。通訳のイブラヒムも雪不足を心配した。

このままだと太干ばつが起る。

ジャララバードで出会ったベシヤワール会の中村哲氏は、「この10年間で、経験したことのない雪不足」と証言した。

山に雪が積もらない↓春先の雪解け水が不足↓川や井戸の水位が下がり作物が育たない↓飲み水にも事欠く飢餓状態が人々を襲つ。

そんな危機的状況のアフガンに米兵が3万人増派され、無意味で無慈悲な殺戮が繰り返される。

想像してほしい。干ばつで食料が急騰、飢えた人々の頭上に、爆弾が落ちてくる。悲劇と憎悪。それでもまだ、明日も食べられるとなれば、人々はかううじてその状況に耐え、自爆はしないだろう。明日、生き続けることができるかわからない状況の中で、少なくとも人々は「ニュータリバン」と化し、米軍など外国軍と対峙する。

2010年、この戦争はますます泥沼化する。そして泥沼化した戦争で米軍の勝ち目はないと、私は断言する。

オバマはますます窮地に追い込まれ、破れかぶれの増派で、米国の若者も、多くが命を落とすだろう。

日本は絶対にこの「オバマの戦争」に手を貸してはならない。そんな思いを込めてこの本を書いた。



ふり返ってみれば03年のイラク戦争開始以来、私は毎年数回、イラクやアフガンを訪問している。戦地を訪れるたびに恐怖心に襲われ、帰国のたびに安堵する。

そんな私の「ヤクザな生活」を支えてくれている妻に感謝しながら、今後もうつした活動を続けていきたい。

2010年1月 カブールから帰国直後、名護市長選挙の基地反対派候補当選の報を聞きながら

西谷 文和

参考文献

- 『ジハード戦士真実の顔』アミール・ミール著 津守滋・津守京子訳 作品社
『タリバン』アハメド・ラシッド著 坂井定雄・伊藤力司訳 講談社
『アフガニスタン 戦乱の現代史』渡辺光一著 岩波新書
『知ってほしいアフガニスタン』レシャード・カレッド著 高文研
『アフガニスタンガイドブック』Juno編纂室著 三一書房
『アフガン戦争の真実』金成浩著 NHKブックス
『オバマ 危険な正体』ウェブスター・G・ターブレイ著 太田龍監訳 成甲書房
『オバマの仮面を剥ぐ』浜田和幸著 光文社
『戦争報道の犯罪』浅野健一著 社会評論社
『アフガニスタンからの証言』ニューインターナショナルナリストジャパン編集部著 汐文社



ジャララバードで、中村哲さん(右)と

西谷 文和 (にしたに ふみかず)

1960年京都市生まれ。立命館大学理工学部中退。大阪市立大学経済学部卒業。吹田市役所勤務を経て、現在フリージャーナリストでイラクの子どもを救う会代表。イラクやアフガンで撮りためた映像や写真を各地で紹介し、平和の大切さを訴えている。

2006年度平和協同ジャーナリスト基金大賞を受賞。

著作に、DVD「戦争あかん①」「戦争あかん②」、ブックレット・戦争あかんシリーズ『報道されなかったイラク戦争』『戦場からの告発』(せせらぎ出版)、『危ない! この先は崖っぷち』(共著・憲法9条メッセージプロジェクト) などがある。

イラクの子どもを救う会

<http://www.nowiraq.com/>

●装幀——濱崎実幸

●漫画——高宮信一

●地図——清水修二

西谷文和の「戦争あかん」シリーズ ③

オバマの戦争 —アフガン最前線から平和の仮面を剥ぐ—

2010年 2月25日 第1刷発行

定 価 600円 (本体571円 + 消費税)

著 者 西谷文和

発行者 山崎亮一

発行所 せせらぎ出版

〒530-0043 大阪市北区天満 2-1-19 高島ビル2階

TEL. 06-6357-6916 FAX. 06-6357-9279

郵便振替 00950-7-319527

印刷・製本所 株式会社関西共同印刷所

©2010 ISBN978-4-88416-190-3

せせらぎ出版ホームページ <http://www.seseragi-s.com>

メール info@seseragi-s.com



この本をそのまま読むことが困難な方のために、営利を目的とする場合を除き、「録音図書」「拡大写本」等の読書代替物への媒体変換を行うことは自由です。製作の後は出版社へご連絡ください。そのために出版社からテキストデータ提供協力もできます。



9784884161903

ISBN978-4-88416-190-3

C0031 ¥571E

定価600円(本体571円+税)



1920031005715

アフガン編 序 章

第1章 カブールにて

第2章 カンダハールにて

第3章 パーミヤンにて

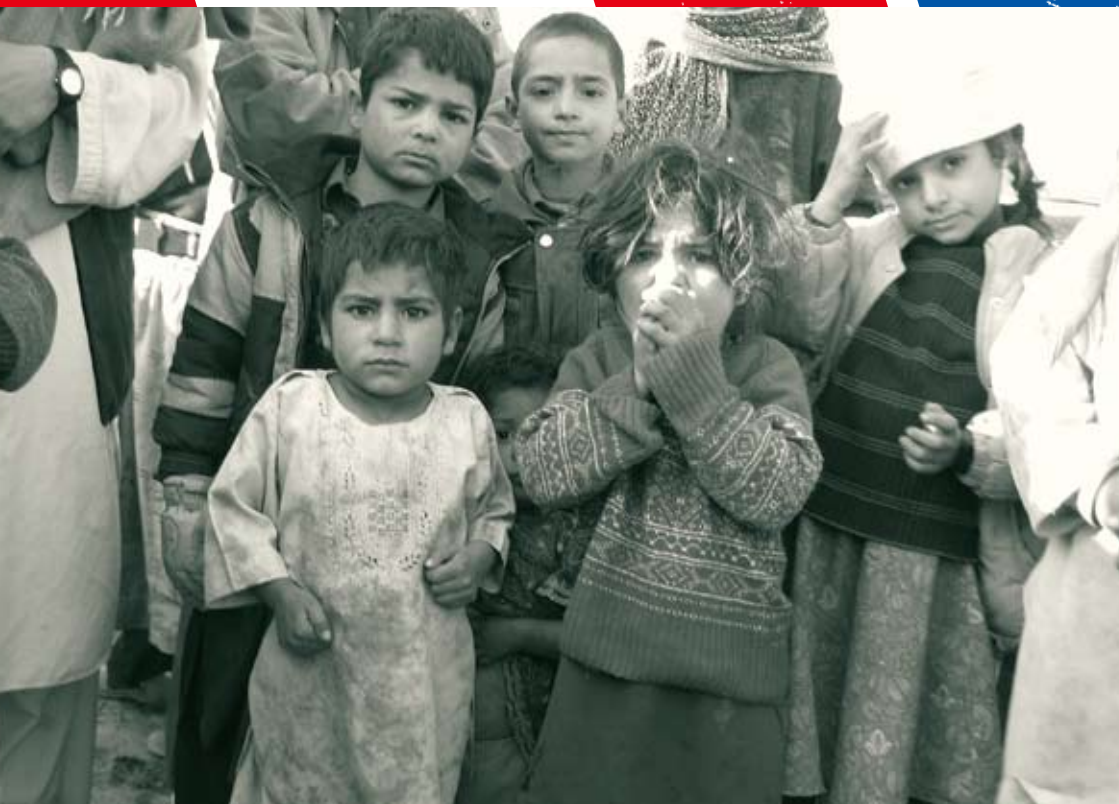
第4章 タリバンの正体

イラク編 序 章

第5章 サマワからバグダッドへ

第6章 バグダッドにて

第7章 モスルにて



もっと読む

●電子本（PDF版、税込420円）を購入する

●紙の本（税込600円）を購入する